

三単現の -(e)s は、なぜ付ける？

—その誕生秘話と指導法—

酒井 典久

初期の英語学習者は、時として一般動詞の三単現の -(e)s 語尾を付け忘れることがあるのではないでしょう。

学習者は、ある動詞にある語尾を付けて意味が変わる場合は、うまく対応できると思います。例えば look に -ed を付ければ、「見る(現在)」が「見た(過去)」に変化するので、学習者は規則動詞の -ed を比較的容易に使いこなすことができるでしょう。

しかし、三単現の -(e)s 語尾の場合、例えば take に -s を付けて takes にしても何ら意味が変わりはないため、学習者はこの -(e)s 語尾をつい付け忘れることがあるのではないのでしょうか。

そもそも三単現の -(e)s 語尾は、一般動詞に付けたとしても意味も変わらないのに、なぜ付けなければならぬのでしょうか。また、この -(e)s 語尾をどのように指導したら、学習者は付け忘れることなく、より正確に使いこなすことができるようになるのでしょうか。本稿では、以上の2点について述べます。まずは1つ目の疑問からです。

英語の場合、ある文が現在時制で主語が三人称・単数のとき、一般動詞に -(e)s 語尾を付けると説明されますが、本稿では少し視点を変えて、この語尾を眺めてみます。次の網かけの部分にご注目ください(ある女生徒が写真を指差しながら、自分の姉を紹介している場面をご想像ください)。

肯定文の場合

This is my sister Mao.

She was a university student.

She works in an office.

She leaves home early.

She has been to San Francisco.

このように一般動詞の -(e)s 語尾は、be 動詞の is・was の -s とあたかも“韻を踏む”かのように使われているのです。もちろん、works の -s の場合は [s] となり、is・was の [z] と完全に“韻を

踏む”というわけにはいきませんが、文字としてはみごとに -s に統一されています。加えてこの“押韻”は、疑問文や否定文でも崩れません。

疑問文の場合

Is she ~?

Was she ~?

Does she ~?

Has she ~?

否定文の場合

She is not ~.

She was not ~.

She does not ~.

She has not ~.

ここで英語発達史をひもといてみます。実のところ、昔の英語には一般動詞のこの -(e)s 語尾は存在せず、三単現の語尾は -th でした。例えば has ではなく hath, leaves ではなく leaveth でした。つまり、is・was とは“韻を踏む”関係にはなかったのです。ではこの -(e)s 語尾は、いつ頃から is・was の -s と“韻を踏む”関係になったのでしょうか。

伝統的な三単現の -th 語尾に対して、-(e)s 語尾を最初に使ったのは、ブリテン島北東部の人たちで、この -(e)s 語尾は、900年代の英語の文献に初めて登場します。そして「北東部の人たち」とは、現在のユトランド半島とその周辺の島々から800年代後半にブリテン島北東部に侵入し、定住したデーン人を中心とするヴァイキングたちでした。

彼らは、400年代に主として現在のドイツ北部の海岸地方からブリテン島にやって来て、すでに住みついていたアングロサクソン人々と融和的に暮らしたそうです。そして、ヴァイキングたち(デーン人たちが)が話すことばと先に住みついていたアングロサクソン人のごとばは、いわば「差の大きい方言同士」だった、とされています。

文字を用いる習慣のないヴァイキングたちは、アングロサクソン人が話すことばの正式な語尾変化を無視し、自分たちの都合のいいように端折りながらアングロサクソン人のごとばをまねていきました。そんな状況の中で誕生したのが、-th 語尾に代わる -(e)s 語尾でした。

ヴァイキングたちが使い始めたこの-(e)s語尾が、ブリテン島の中部や南部でも次第に用いられるようになり、700年くらいかかって-th語尾に完全に取って代わり、is・wasの-sとほぼ“韻を踏む”関係になったのです。

ヴァイキングたちが、-th語尾の代わりに-(e)s語尾を用いるようになった理由については、いくつかの説があります。例えば、古期スカンジナビア語に-sという動詞の変化語尾があった、あるいはisと韻を踏むように用いた、あるいは-thを発音するのがおっくうだったので-sと発音した、などの説があります。筆者は、これらの事象が複合的に関わって、この新しい-(e)s語尾が誕生したのではないかと想像しています。

では、以上のような-(e)s語尾のルーツを踏まえ、この語尾の効果的な指導法を考察します。まず、筆者が提案したいことは、isの-sとこの-(e)s語尾の-sの有機的な結び付きを学習者にもっと意識してもらってはどうか、ということです。例えば、次の2つの文がほぼ同じ意味になるように()に適当な語を書き入れる練習をします。

Tom is a very good soccer player.

≡ Tom () soccer very well.

一般的には、「Tom () soccer very well. という文の時制は現在で、主語(Tom)が三人称・単数なのでplayに三単現の-sを付けてplaysが答えになる」と説明されると思います。この説明のイメージを図示してみます。

Tom () soccer very well.

→ → →

ここでは学習者の視線が、主語のTomからいわば水平方向に進んでいくのではないのでしょうか。これに対し、筆者の提案は、視線を垂直方向に動かしてはどうか、というものです。すなわち、さきほどの1組の文の主語(Tom)が変わらない以上、どんな一般動詞を用いようとも、isの-sと“韻を踏む”かのように一般動詞の語尾もisの-sとそろそろ、という事実を学習者にもっと活用してもらってはいかがでしょうか。

Tom is a very good soccer player.

↓

≡ Tom s soccer very well.

つまり、答えを考えると、()内の動詞の

語尾はisと韻を踏むのだから、とりあえず(s)と学習者に発想してもらうのです。その後、名詞のplayerからplayという動詞を思い浮かべれば、正解のplaysに容易に至ることができます(助動詞が用いられない場合のみを想定しています)。

加えて日頃から、次のように視線を垂直方向に動かしてもらい、各組の文の意味はほぼ同じで、isの-sと“韻を踏む”かのように一般動詞の-(e)s語尾が用いられている、ということを経験者にもっと意識してもらってはいかがでしょうか。

Everyone here is happy.

⇕

≡ Everyone here feels happy.

Jim is dependent on his parents.

⇕

≡ Jim depends on his parents.

Your opinion is different from mine.

⇕

≡ Your opinion differs from mine.

Happiness is in mind.

⇕

≡ Happiness lies in mind.

時には、isとliesのように“韻を踏む”関係というより、isがliesに完全に含まれるという場合もあり、これは極めて密接で興味深い関係である、と言えるのではないのでしょうか(isとlivesやisとstudiesなどの例もあります)。

Mai is a very hard-working student.

≡ Mai studies very hard.

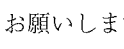
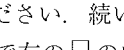


中には、-(e)s語尾が付いた一般動詞のこのような語形は、何か特別なもので、いまひとつ馴染めないと感じている学習者も少なからず存在するのではないのでしょうか。上記のliesやstudiesなどの語形は、決して特別な語形ではなく、頻繁に用いられるisと同じくらい身近で親しみやすいものなのだ、ということを理解してもらいたいです。

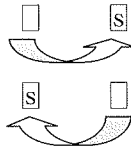
さらに考察を続けます。三単現の-(e)s語尾と、あるもう1つの語尾との有機的な関係に着目すると、三単現の-(e)s語尾をさらに正確に、そしてもっと楽しく運用することが期待できます。そんな、ある


もう1つの語尾とは？



その語尾とは、複数の-(e)s語尾です。実のところ、この複数の-(e)s語尾もヴァイキングたちが英語にもたらしたもののなのです。アングロサクソン語の複数語尾には、-as, -um, -a, -e, -enなどいろいろあり、その語の性・数・格に応じて使い分けられていました。

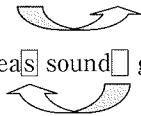
ところが、ヴァイキングたちは、男性名詞の主格の複数語尾-as(後に-esに変化)だけをもっぱら使い続けました。やがて、彼らの-(e)sという複数語尾がほかの複数語尾に完全にとってかわり、今日に至っているのです。彼らの三単現の-(e)s語尾が-th語尾に完全にとってかわったように。



では、三単現の-(e)s語尾と複数の-(e)s語尾との関係について述べます。その前にちょっとしたイメージトレーニングをお願いします。まず、を思い浮かべてください。続いて、の中にある“s”をイメージの中で右のの中に“スッ”と移動してください。そして再び左のの中に“スッ”と戻してください。

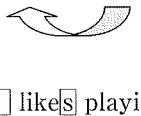




そして実際に英語を用いる場合にも、次のように2つのを思い浮かべ、一方からもう一方へ“s”を“スッ”と移動させるかのように用いるのです。

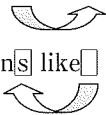
Your idea sound good.





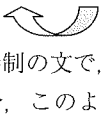
Your idea sound good.





My son like playing soccer.




My son like playing soccer.






現在時制の文で、主語が加算名詞で動詞が一般動詞の場合、このように2つのを思い浮かべ、どちらか一方のに“s”が必ず現れるように、すなわち“s”が2回連続しないように用いますと、この2種類の“s”を正しく、加えて楽しく用いることができます。そして、このようにイメージしますと、まったく異なる2種類の-(e)s語尾が有機的に結び付

いているように見えてくるのではないのでしょうか(主語が they, people, James さんのような場合には当てはまりませんが)。

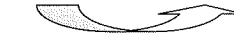
また、現在時制の文で、主語が加算名詞で動詞が be 動詞の場合にも、2つののどちらかに“s”が現れるように、すなわち“s”が2回連続しないように用いる、とイメージできそうです。少々強引ですが。

Your idea is good.

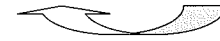
Your idea are good.



さらに、「2つのを思い浮かべ、どちらか一方に-(e)sが必ず現れるように用いる」というイメージは、疑問文や否定文にもほぼ当てはまります。特に、do(es)と dress(es)「洋服」や watch(es)「時計」などの場合はきれいに見えます。

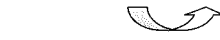
Do the dress look nice on me?





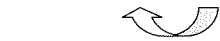
Do the dress look nice on me?





The dress do not look nice on me.





The dress do not look nice on me.




さらに、このイメージは関係詞節の場合にも当てはまります。


the book that interest you



the book that interest you



共にヴァイキングたちが使い始めた2種類の-(e)s語尾は、現代英語にまで生き残り、2つのの中を行ったり来たりしながら共生している、と言えるのではないのでしょうか。

三単現では、「可算名詞が関わる場合、2つのを思い浮かべ、どちらか一方に-(e)sが必ず現れるように用いる」というイメージと、「どんな一般動詞を用いようとも、isの-sと“韻を踏む”かのように一般動詞の語尾もisの-sとそろおう」という2つのことをさまざまな場面で指導に生かしていただけたら幸いです。

最後に、ヴァイキングたちのことばが近代英語の成立に、いかに大きな影響を及ぼしたかについて述

べます。話は410年にさかのぼります。

410年、それまでブリテン島のブリトン人(ケルト人)を支配しながらこの島に駐留してきたローマ軍が本国に撤退していきます。すると、この島の北部に住む蛮族の活動が活発になり、残されたブリトン人が蛮族の攻撃を受けるようになります。

その攻撃に耐えかねたあるブリトン人の領主がほうぼうに助けを求めます。その助けに応じたのが、現在のユトランド半島に住んでいたジュート族でした。ジュート族は3隻の船に乗ってやって来て、ブリトン人を蛮族の攻撃から守ってくれたまではよかったのですが、この島がとても肥沃で住みやすいことが大陸に伝わってしまいます。

449年、ジュート族がブリテン島の南西部に入植したのをきっかけに、サクソン族やアングル族も大挙してこの島に入植してきたのです。その中で、アングロサクソン族が優勢となり、500年代の終わり頃までには「アングロサクソン七王国」を成立させていた、とされています。

時代が進み、700年代後半から、北欧やその周辺に住むヴァイキングたちの活動が活発になり、ブリテン島の海岸部の町が襲われるようになります。時代が進むにつれて、ヴァイキングたちは略奪を繰り返す、というより入植地を求めるようになります。北欧やその周辺における人口が増えたためかもしれません。

800年代後半になると、イングランド王とヴァイキングたちの戦いはその激しさを増し、871年だけでも規模の大きな戦いが9回あった、とされています。

878年、アルフレッド王(イングランド王)は、デーン人を中心とするヴァイキングたちとの戦いを終結させようと彼らと和議を結ぶ中で、彼らがブリテン島北東部に入植するのを許しました。その代わりに、その北東部と中部の境界線を越えないようヴァイキングたちに約束させました。この北東部の地域には、デーン人の法律が適用されるので、この地域はDanelawと呼ばれました。

この地域に入植したヴァイキングたちの話すことが元になって、後の「北部方言」(右上の図の黒い部分)が誕生しました。この図は、1000年頃のブリテン島の方言の様子を示したものです。彼らの「北部方言」がその後、近代英語の成立に及ぼした



影響をまとめてみます。

- ・新しい三単現の-(e)s語尾を誕生させた。
- ・-(e)s以外の複数語尾をほとんど消滅させた。
- ・「男性名詞・女性名詞・中性名詞」の区別を消滅させた：英語の「名詞の性」は1000年頃、まず北部方言で消滅し、それが英語全体にも広がった。
- ・動詞原形の-enという語尾を消滅させた：アングロサクソン語の動詞の原形は、-an(後に-en)で終わっていたが、ヴァイキングたちの動詞原形は-a(後に-e)で終わっていた。例えば現代英語のtake, getはそれぞれtaka, geta(後にgete → get)だった。-enを用いないすっきりとした動詞原形が英語全体にも広がり、アングロサクソン語の-en語尾のほとんどを消滅させた(bringan → bringen → bringe → bring)。ただし-en語尾は名詞・形容詞を動詞化する語尾として一部残った。例えばdeepen「深くする」、reddean「赤くする」は1600年代に作られた。

英語が今日、世界中にこんなにも広がったのは、ヴァイキングたちがアングロサクソン語を徹底的に簡素化してくれたおかげなのかもしれません。

参考文献

- 荒木一雄(監修者)(1993)『古英語の初歩』英潮社。
 荒木一雄(監修者)(1997)『中英語の初歩』英潮社。
 荒木一雄(監修者)(1993)『近代英語の発達』英潮社。
 中尾俊夫・寺島廸子(1988)『図説 英語史入門』大修館書店。

(帝京長岡高等学校常勤講師)